



令和8年夏の台風の特徴 台風第15号の過去あまり例のない経路

気象庁大気海洋部

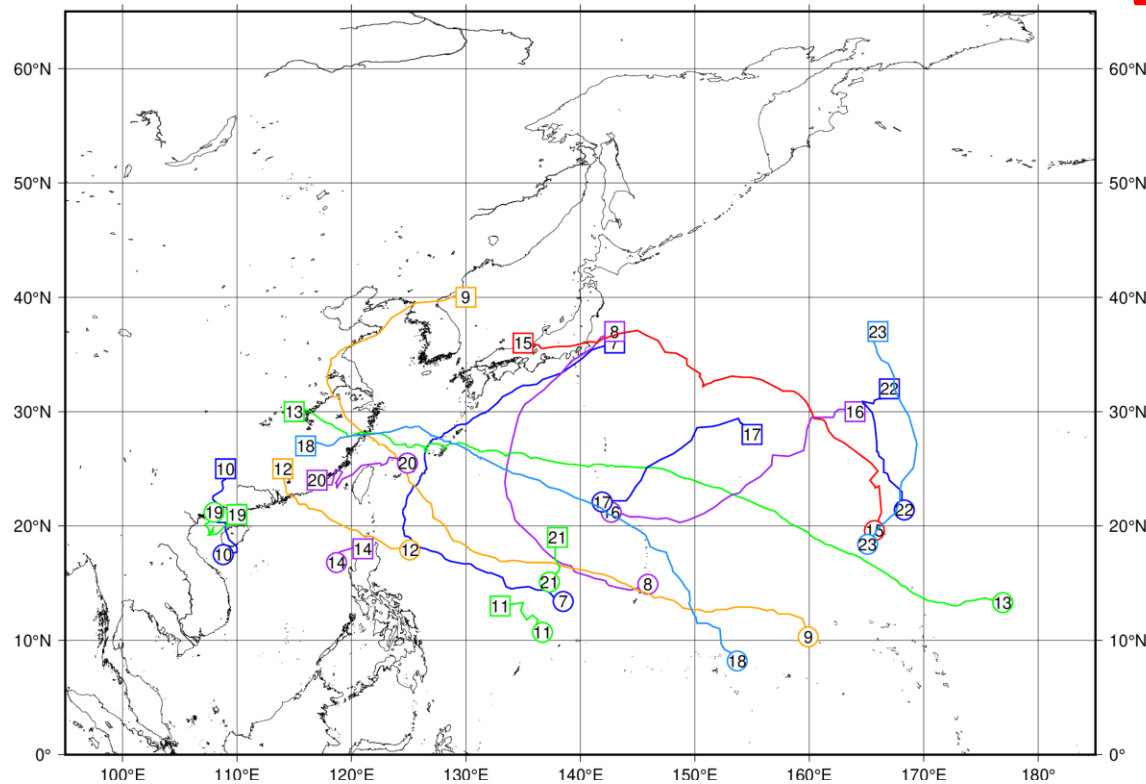
2026年9月1日 異常気象分析検討会

令和8年夏の台風の特徴

令和8年の台風の発生数

(8月31日現在)

年/月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
2026年 (速報値)	1	1	1	1	2	2	5	10	?	?	?	?	23
平年値 (1991-2020)	0.3	0.3	0.3	0.6	1.0	1.7	3.7	5.7	5.0	3.4	2.2	1.0	25.1



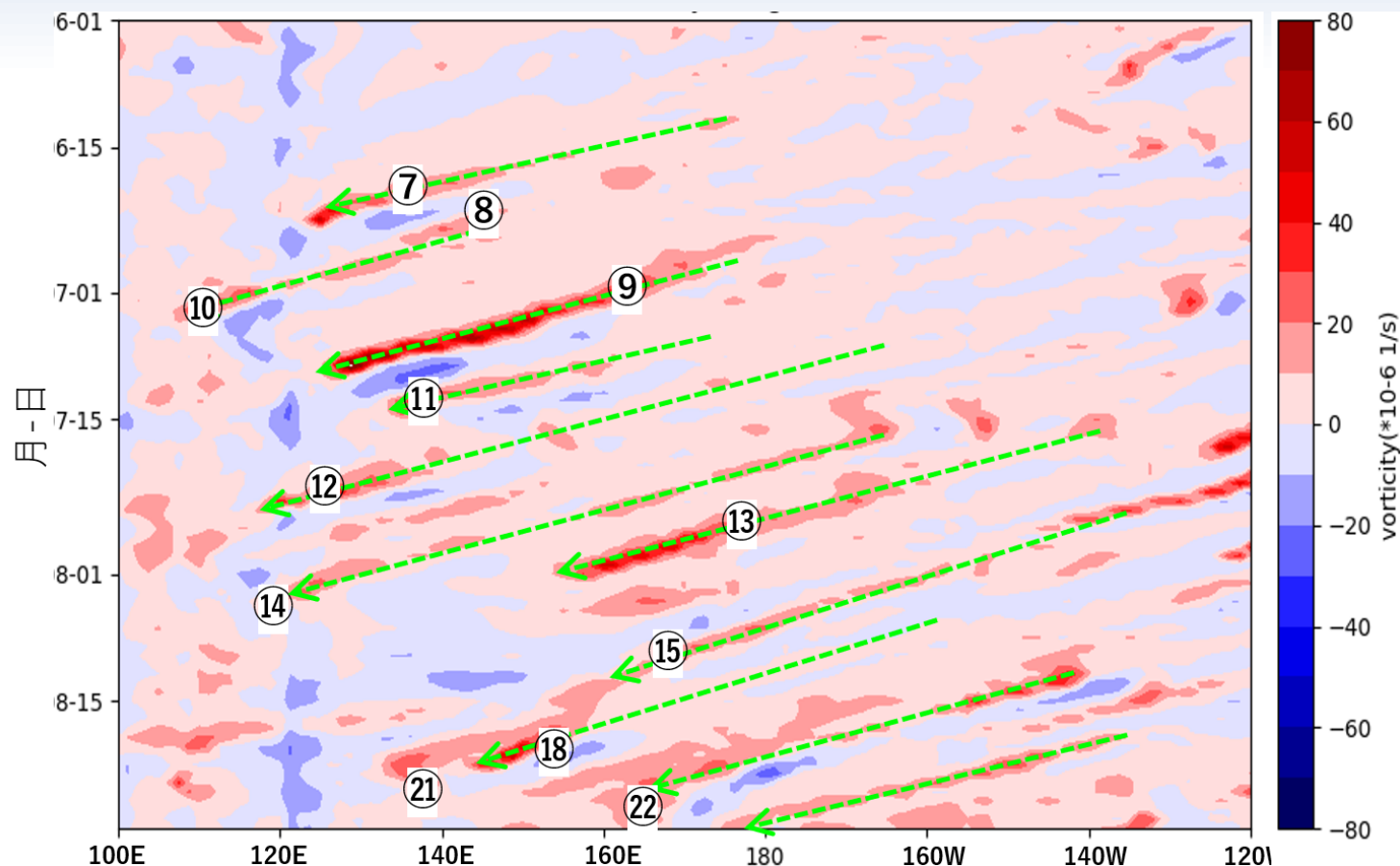
令和8年夏の台風経路図(第7号～第23号)

経路の両端の○と□は台風の発生位置と消滅位置、数字は台風番号を示す

- 夏(6～8月)の発生数は17個
 - 平年値11.0個を大きく上回る
 - 昭和26年以降で3位タイの多さ
 - 8月の発生数10個は1位タイの多さ
- 8月までの発生数は23個
 - 平年値13.5個を大きく上回る
 - 昭和26年以降で2位の多さ
 - ⇒夏の多数発生が寄与

夏の台風多数発生要因(再掲)

偏東風波動と台風

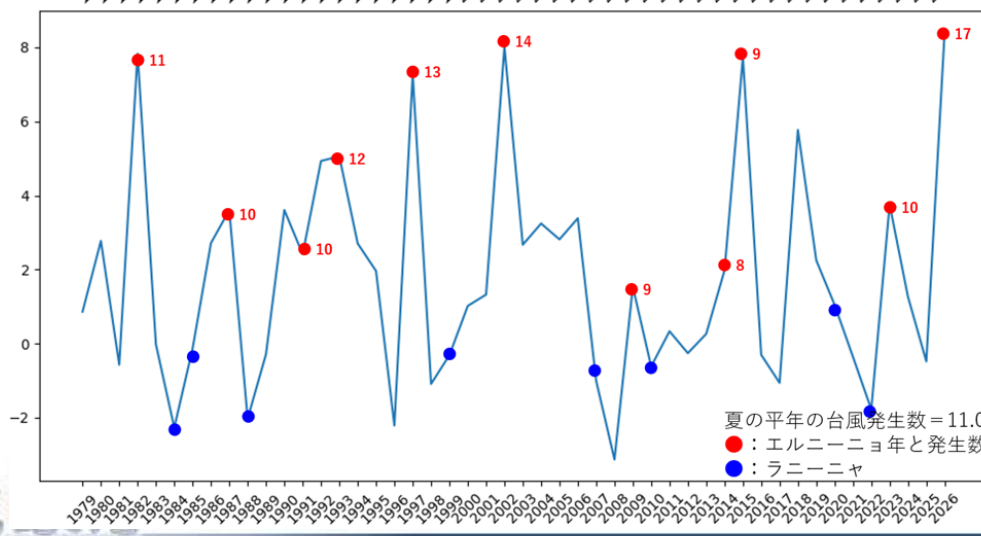
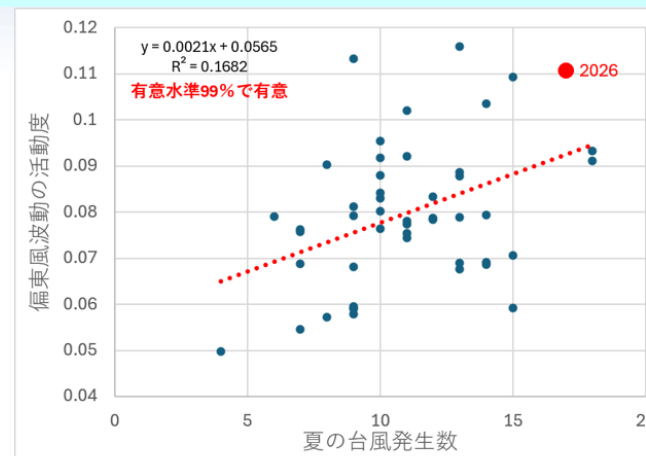
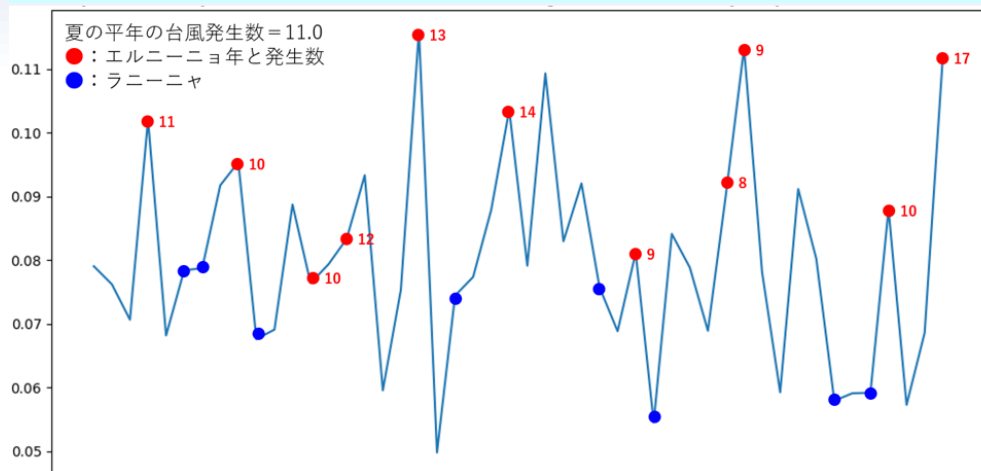


- 2026年夏は偏東風波動の活動が活発だった
- 赤道ロスビー波のようなものが多いが、混合ロスビー重力波のようなものもあるため、ここでは偏東風波動と総称した
- 発生した17個のうち、T16, T17など数個を除いて、偏東風波動起源で発生している
- T13は、熱源応答も加わって、ロスビー波的に西北西進し、モンスーンジャイアの形成につながった

2026年夏の偏東風波動の状況 (5~20N平均渦度の時間経度断面)
丸数字は、その時間・経度で発生した台風番号 (20N以南で発生したもののみ)

夏の台風多数発生要因(再掲)

偏東風波動の活動度の経年変化



左上図：夏の偏東風波動の活動度の経年変化（2026年は8/29まで）
5～20N平均850hPa渦度の120E～150W領域の根2乗平均から算出

左下図：夏の偏東風領域（左上図と同じ）平均の順圧不安定変換効率
($-\overline{u'v'} \cdot (\partial \overline{u} / \partial y) / 0.5(\overline{u'^2} + \overline{v'^2})$) の経年変化（2026年は8/29まで）

右上図：夏の台風発生数と偏東風波動の活動度の関係

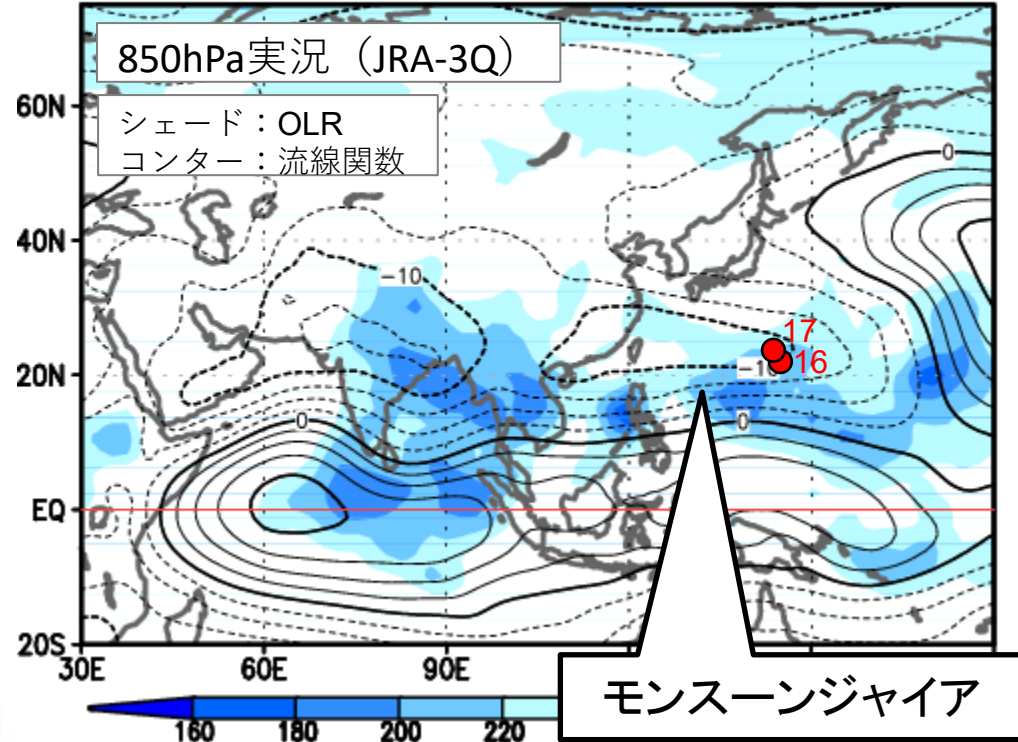
いずれも2026年の台風発生数は8/29まで

- ・ エルニーニョ年は、偏東風波動の活動が活発で、
ラニーニャ年は、不活発
- ・ 台風の発生数と偏東風波動の活動度には、有意水準
99%で、有意な相関がみられた
- ・ 一方、エルニーニョ年に必ずしも多くはない

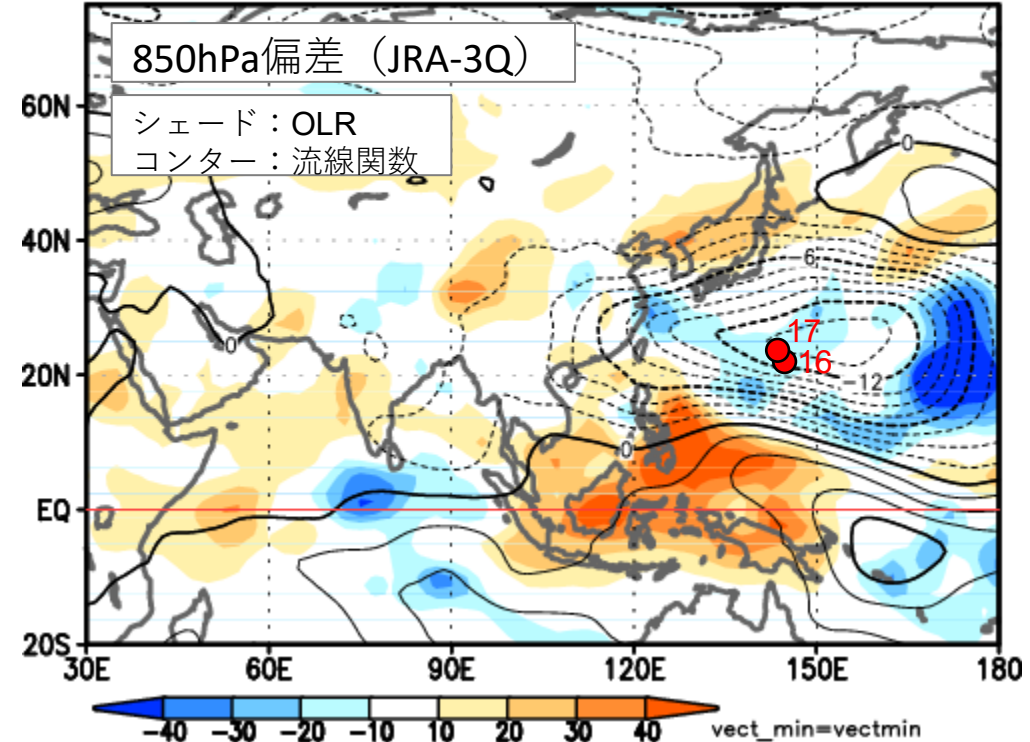
8月前半のモンスーンジャイアによる台風発生

- 8月前半を中心に日本の南に大きな低気圧性循環の形成が維持され、その周辺で台風が幾つか発生した

01Aug.2026 – 14Aug.2026

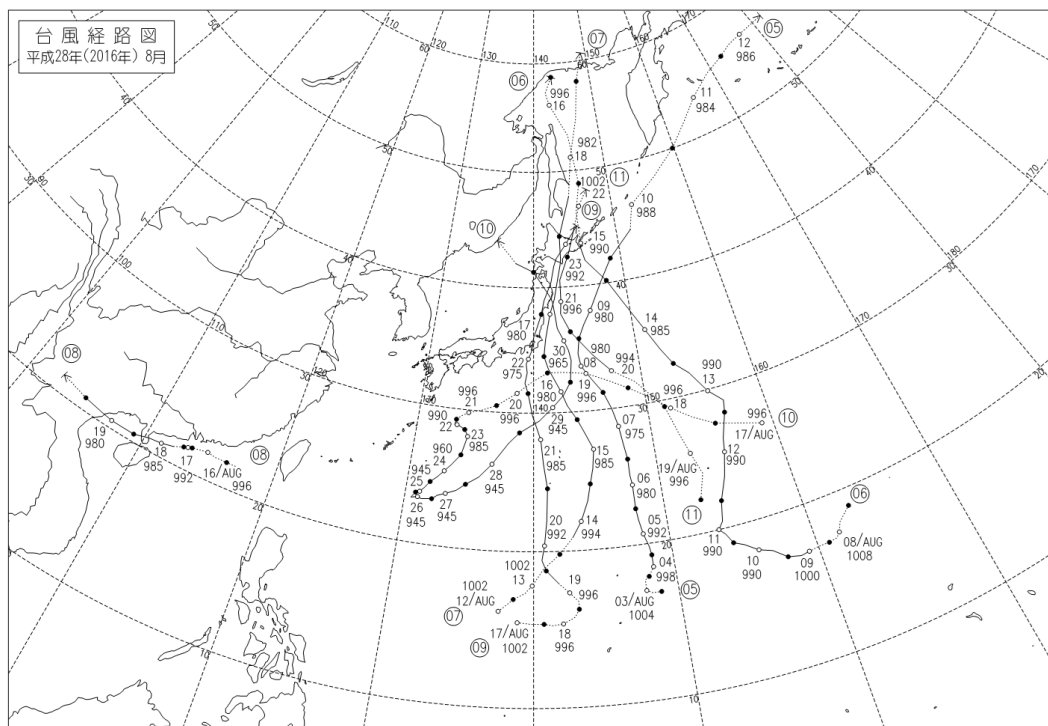


01Aug.2026 – 14Aug.2026



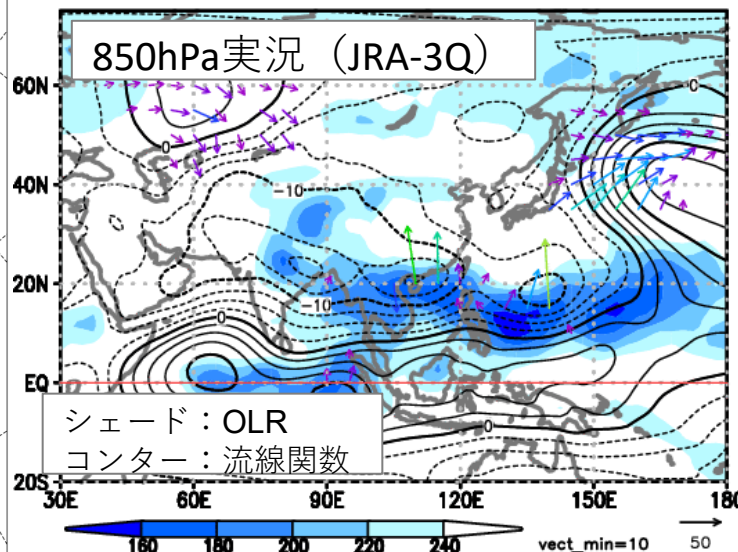
モンスーンジャイアからの台風多数発生の過去例

- 近年では、2016年8月において、モンスーンジャイアの周辺で台風が多数発生した



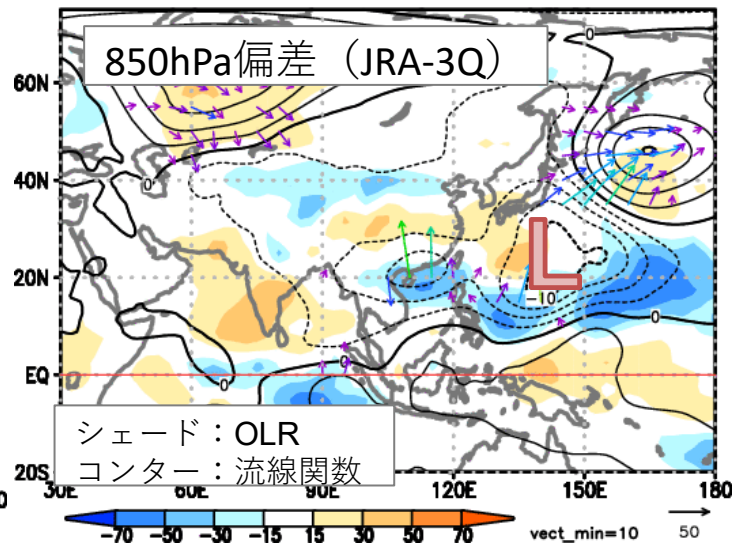
丸で囲った数字は台風番号である。経路上の○印は傍に記した日の9時、●印は21時の位置で、→は消滅を示す。また、経路の実線は台風、破線は熱帯低気圧あるいは温帯低気圧の期間を示す。

11Aug.2016 – 20Aug.2016



シェード：OLR
コンター：流線関数

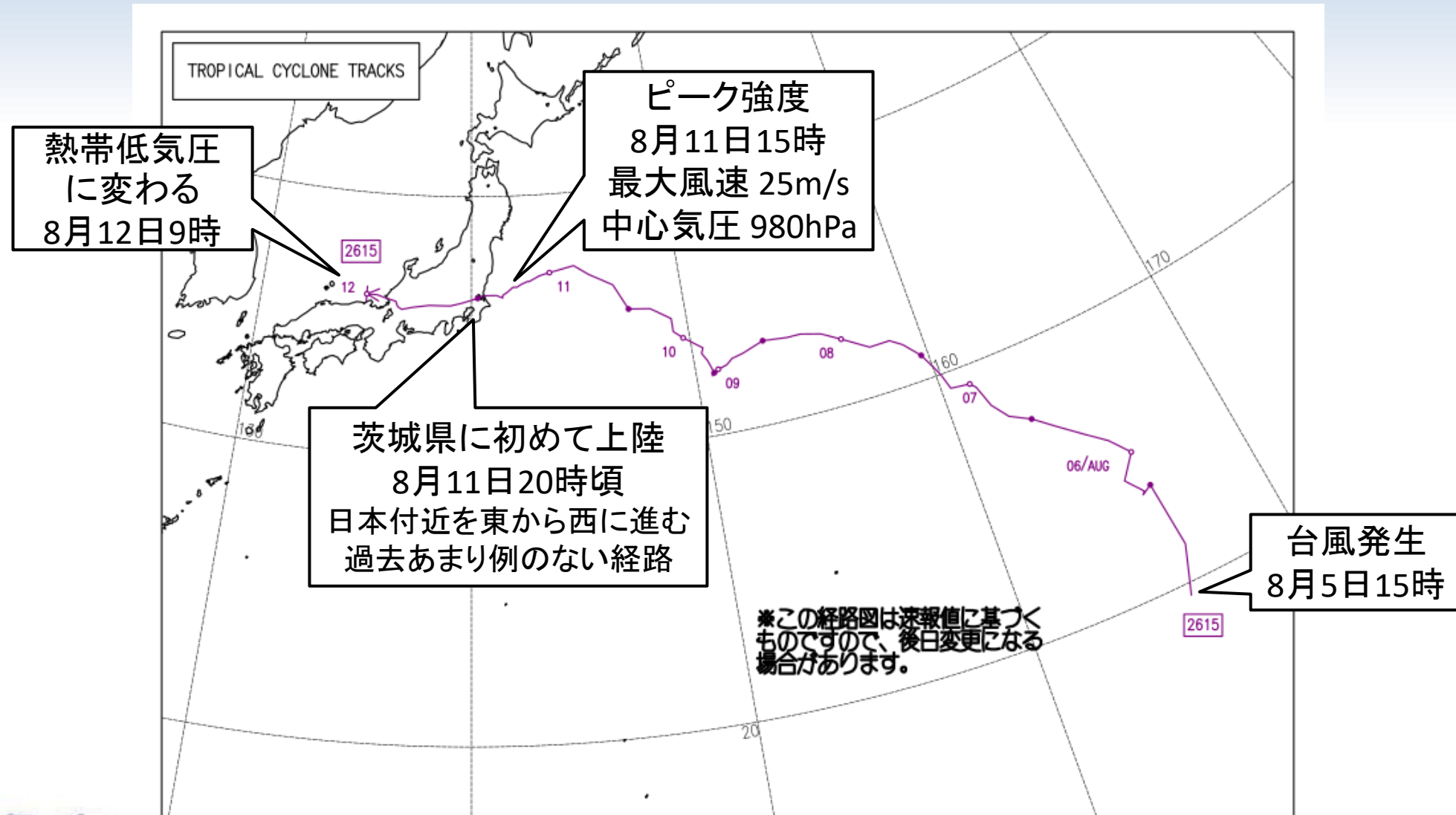
11Aug.2016 – 20Aug.2016



シェード：OLR
コンター：流線関数

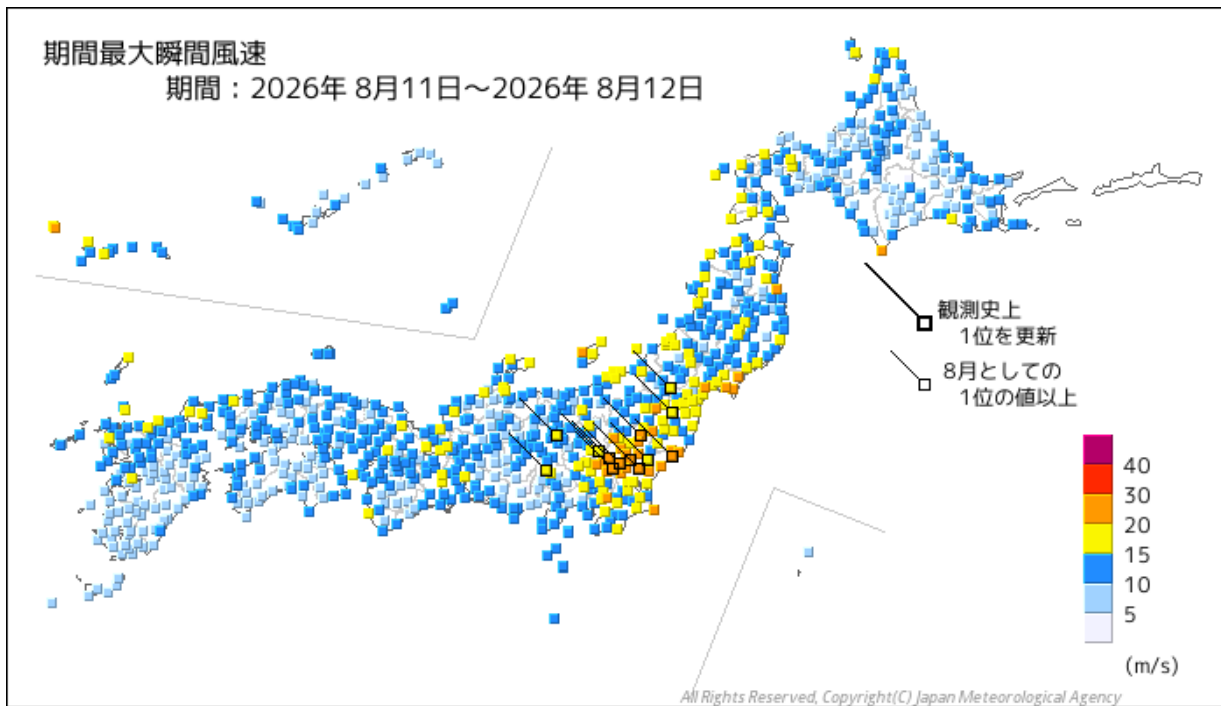
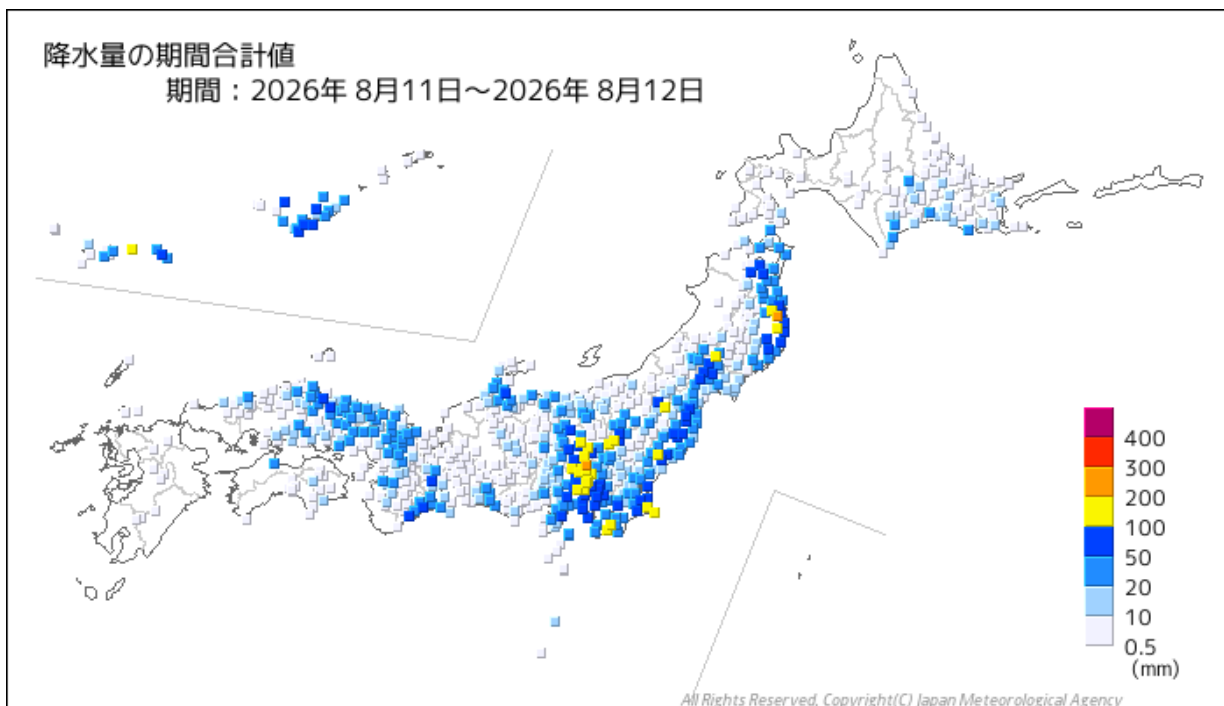
台風第15号の過去あまり例のない経路

台風第15号の概要



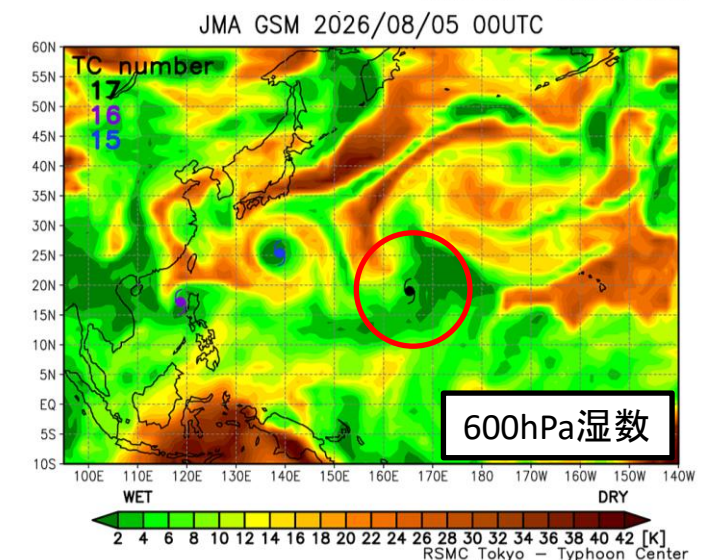
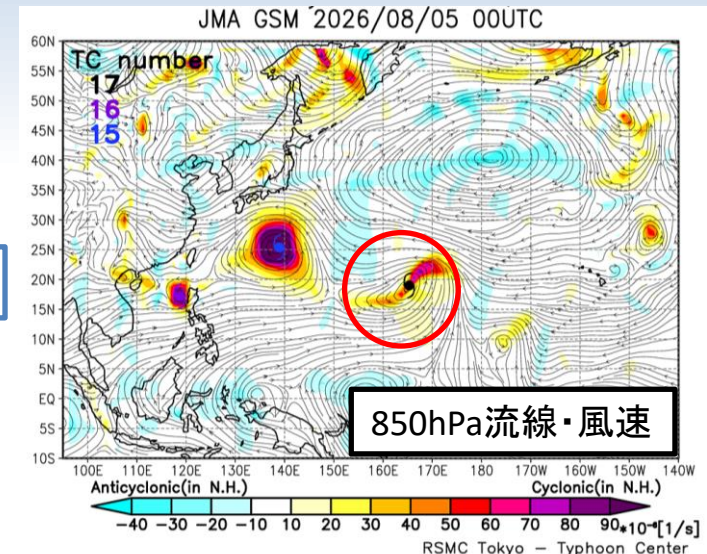
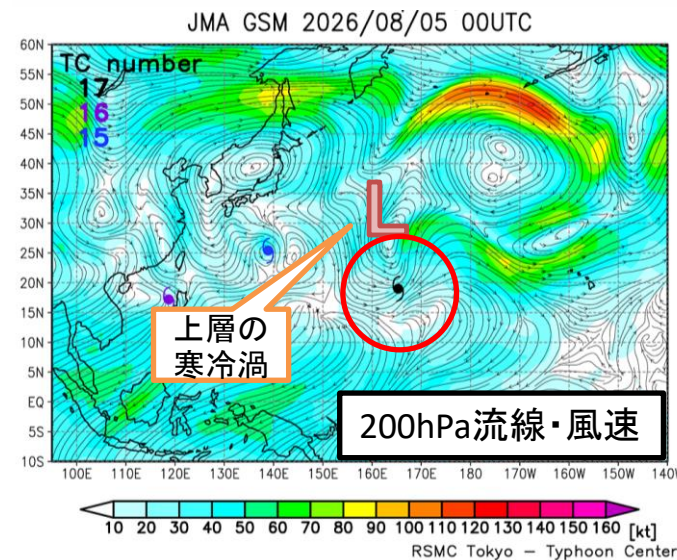
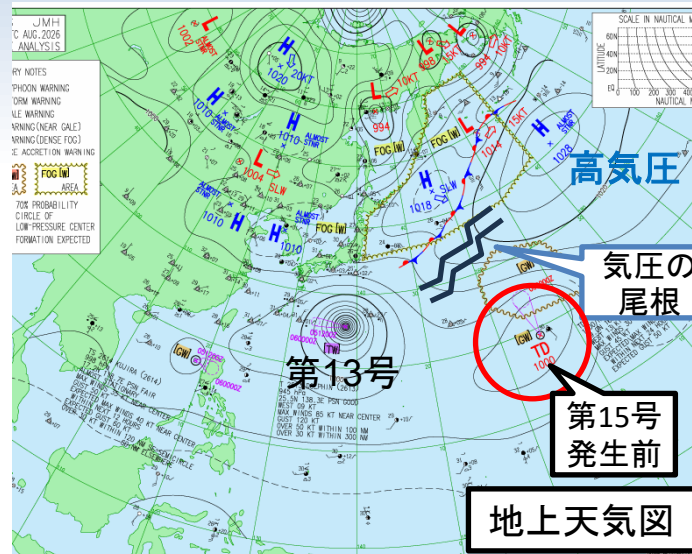
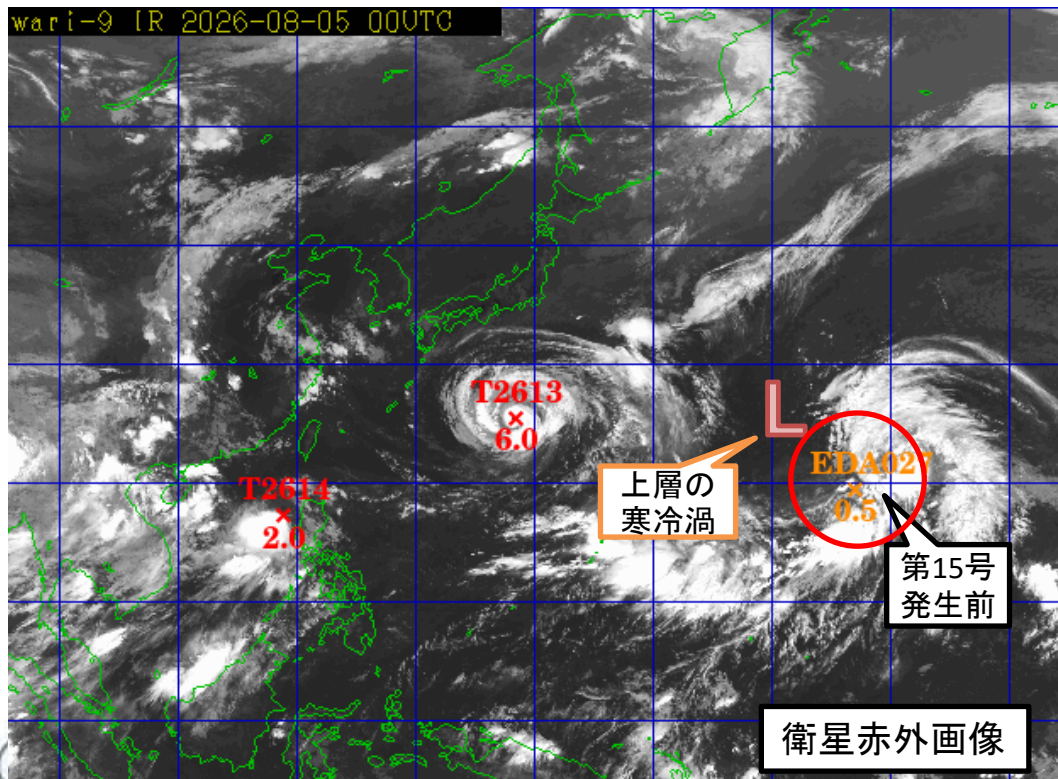
台風第15号に伴う大雨・強風

- 関東甲信地方や東北地方では、8月11日から12日の合計降水量が200ミリを超えて、8月1か月の平年値を超える大雨となったところがあった。
- また、関東甲信地方や東北地方では、11日は25メートルを超える最大瞬間風速を観測し、8月としての1位となる強風が吹いたところがあった。



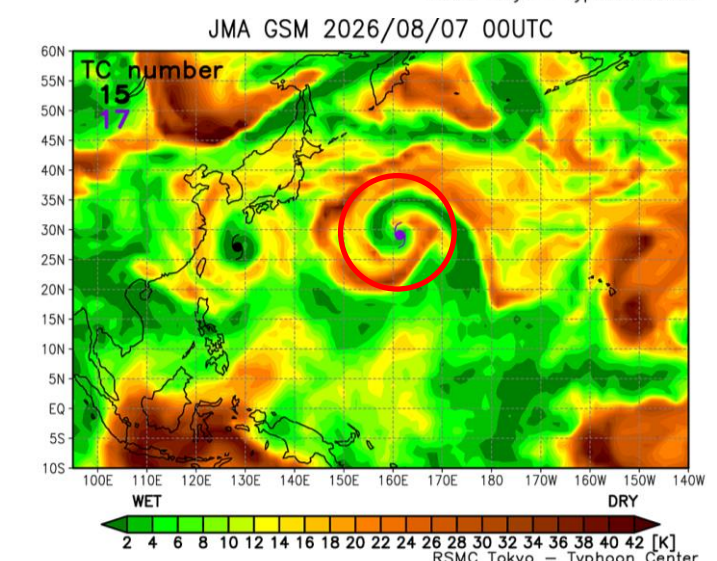
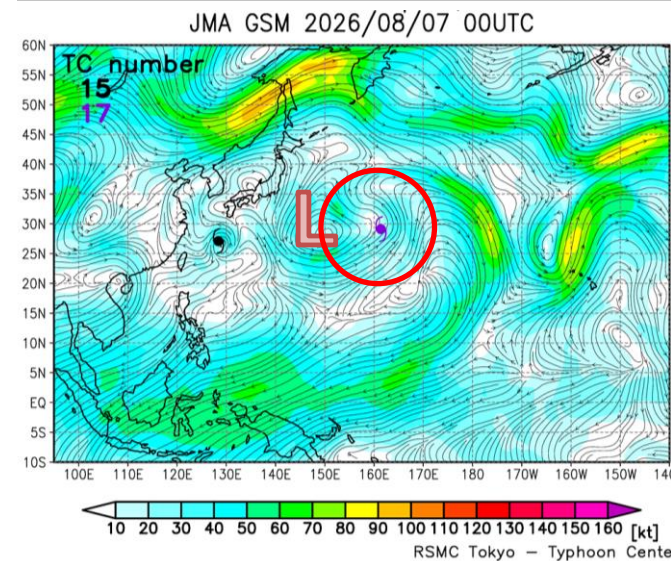
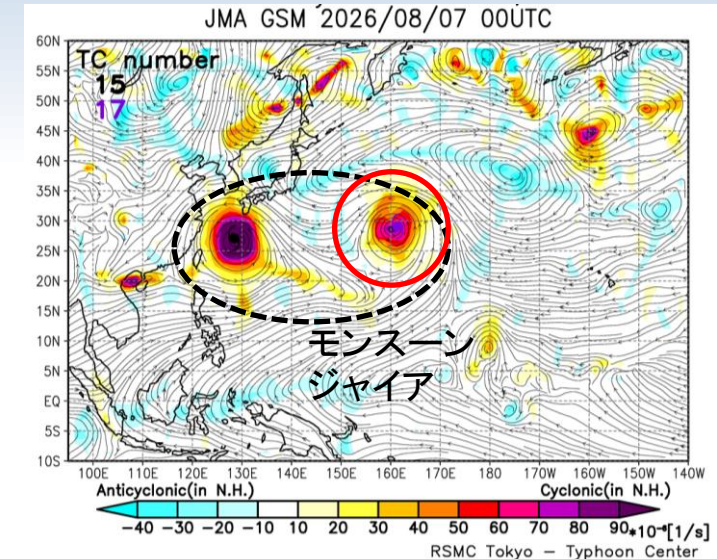
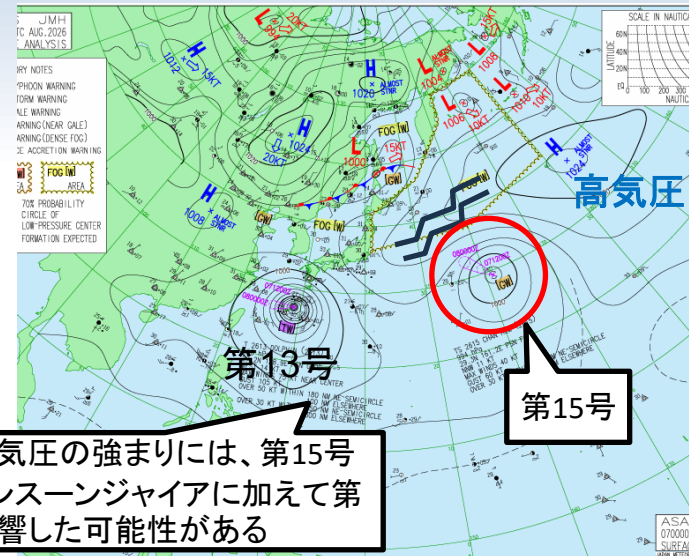
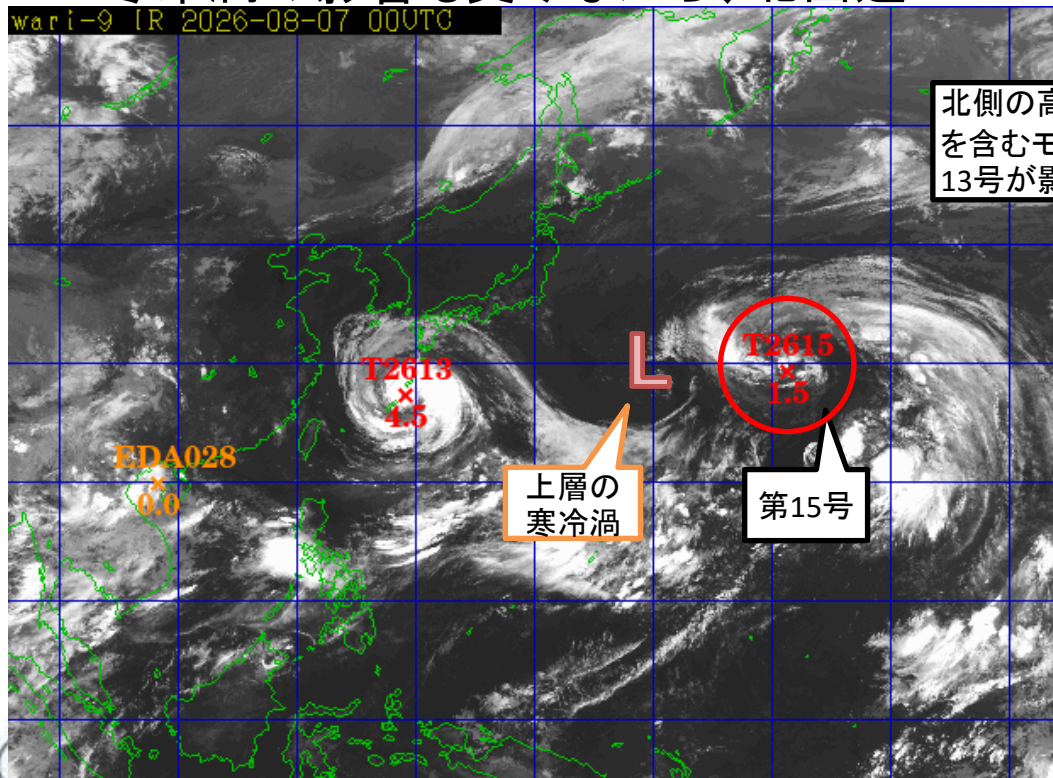
台風第15号 8月5日00UTC

- 上層寒冷渦の南東側で積乱雲が集中して発生し、その中から台風が発生
- 台風は上層寒冷渦の東側の北向きの流れに沿って北上



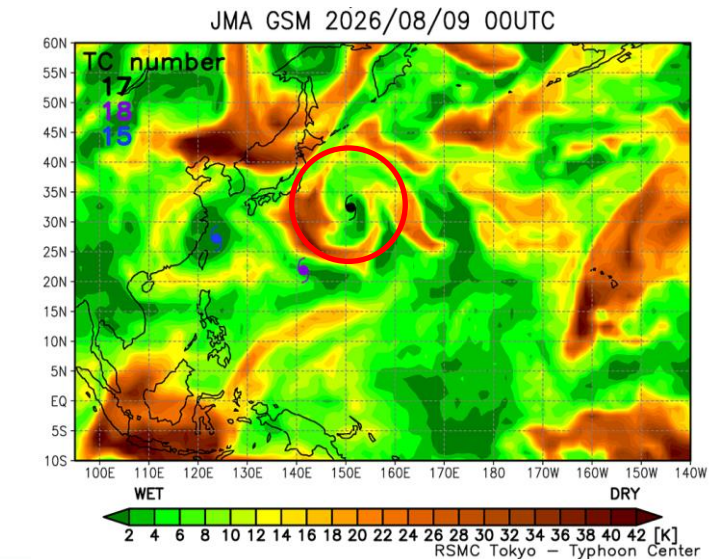
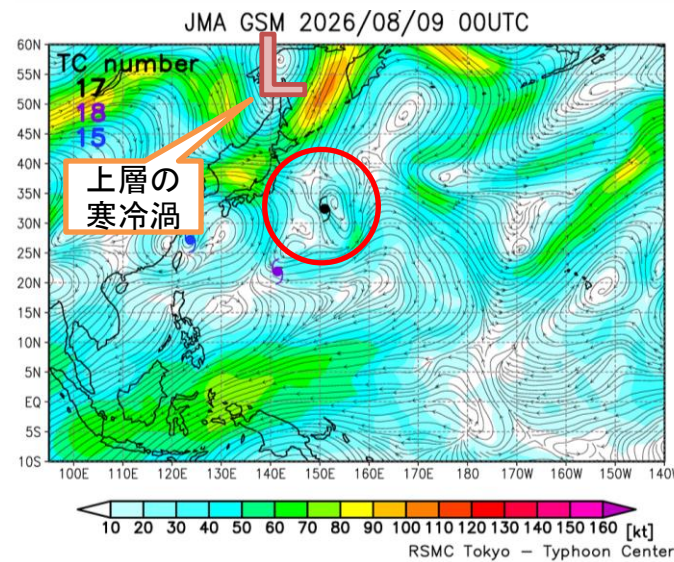
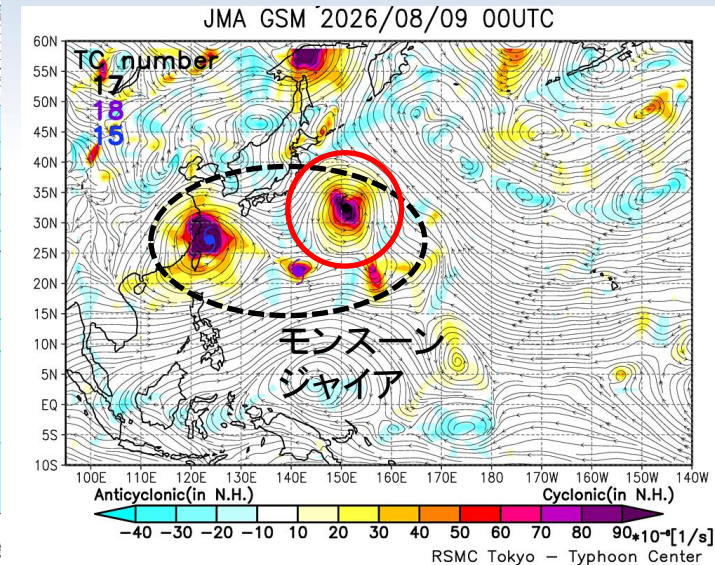
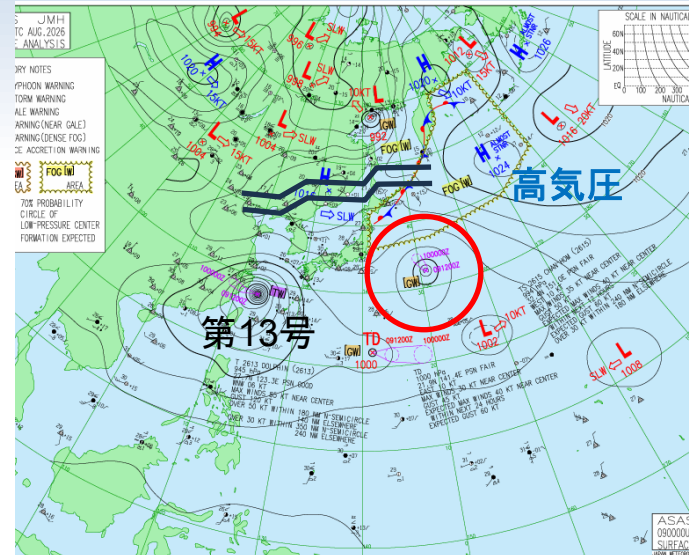
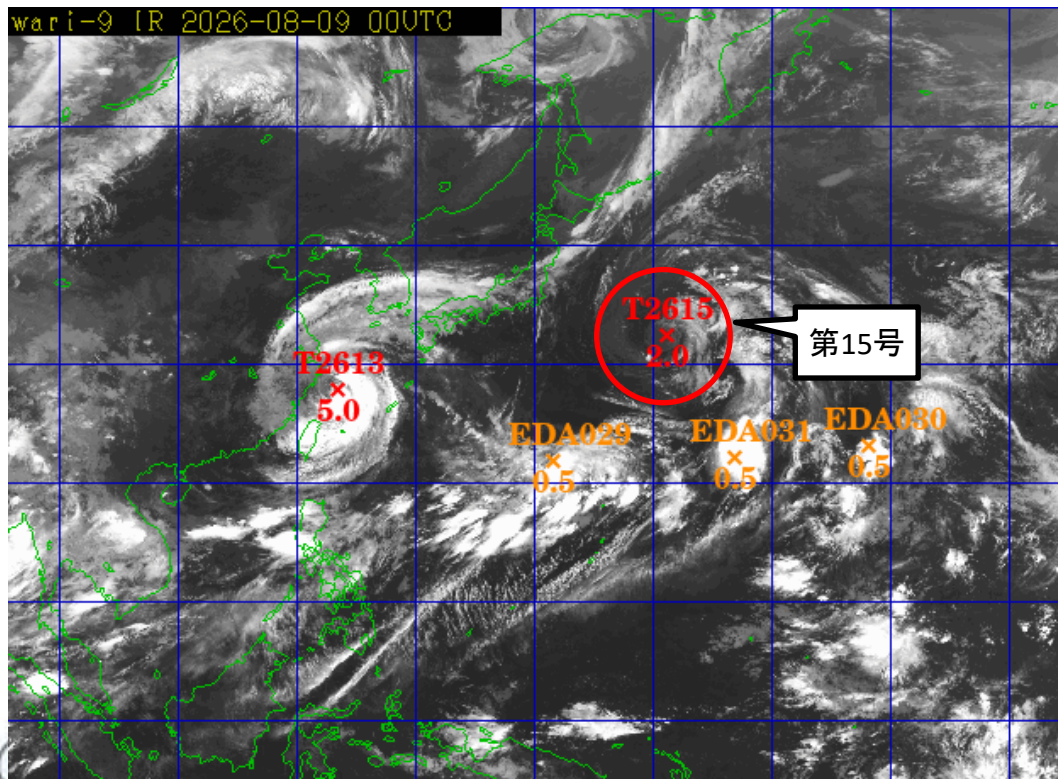
台風第15号 8月7日00UTC

- 上層寒冷渦の周辺の乾燥域が中心付近に流入し、中心付近の積乱雲は消散
- 北側の勢力の強い高気圧と南側のモンスーンジャイアの流れに沿って、上層寒冷渦の影響も受けながら、北西進



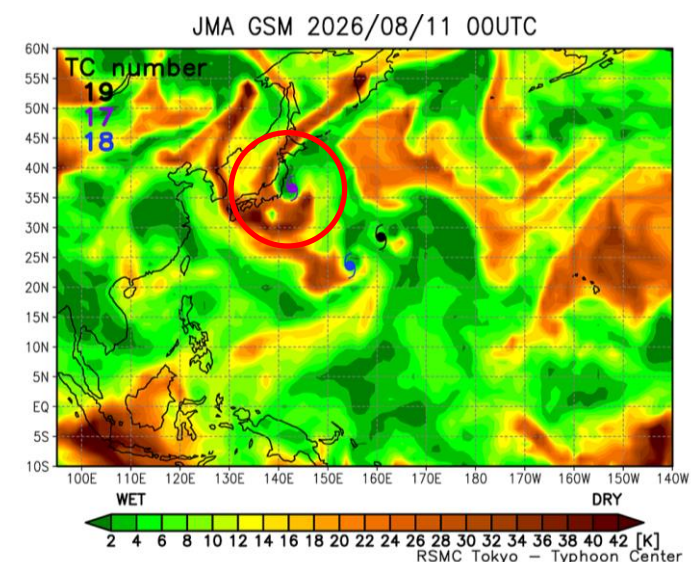
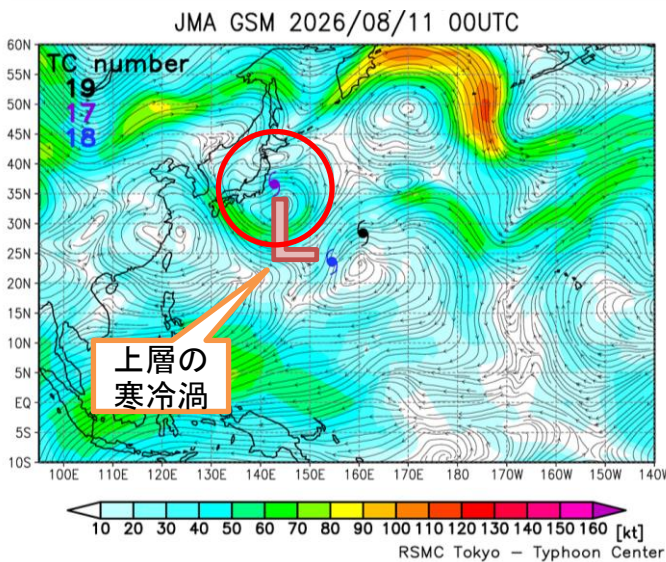
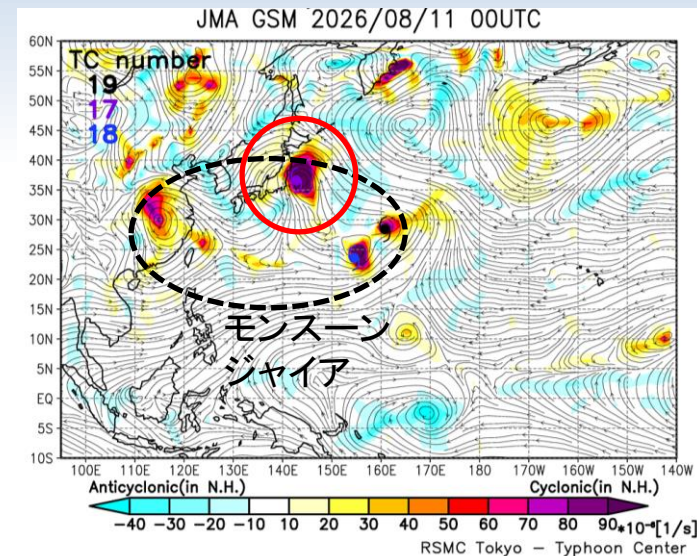
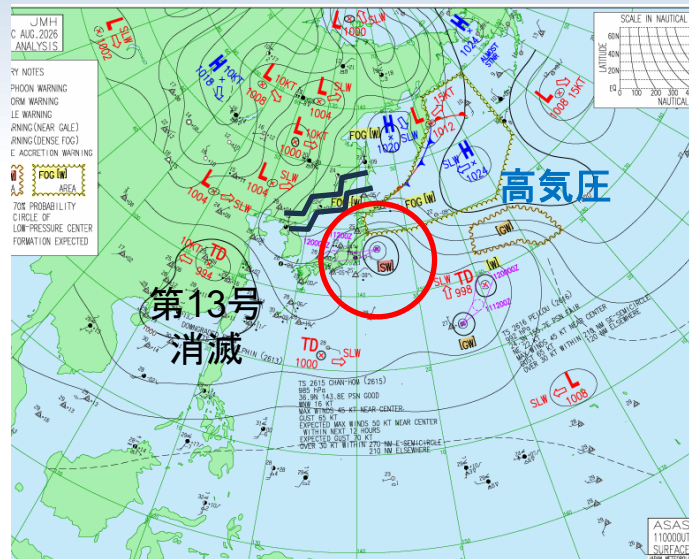
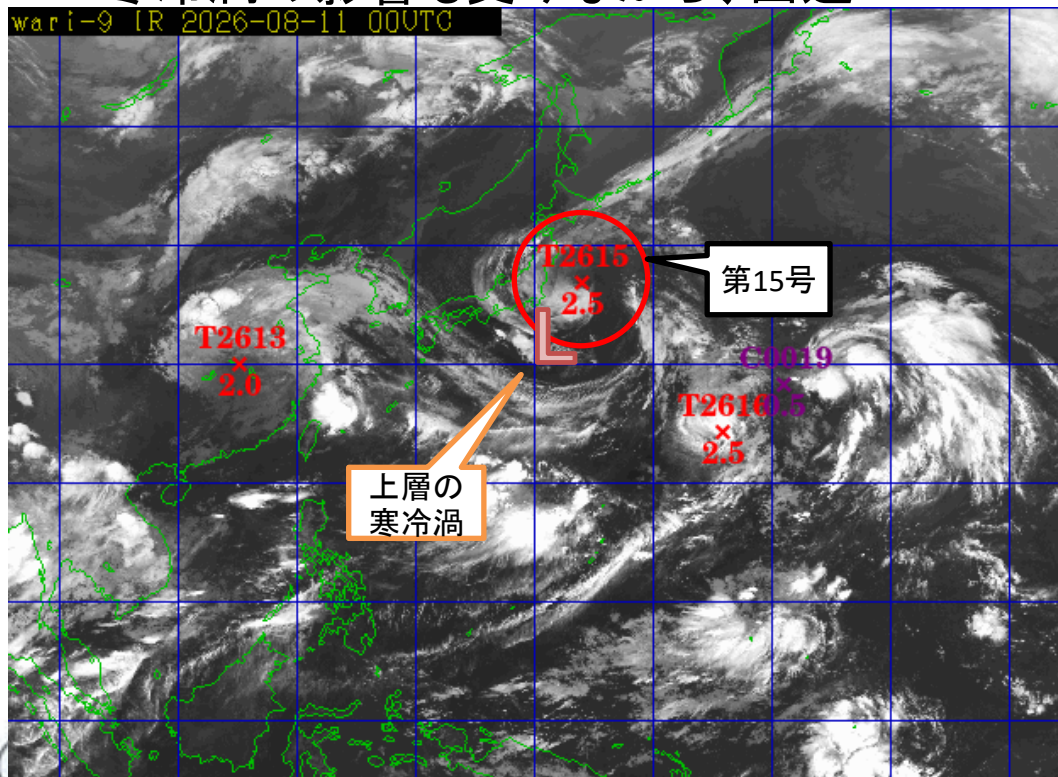
台風第15号 8月9日00UTC

- 乾燥域が中心付近に流入し、下層渦が露出
- 北側の勢力の強い高気圧と南側のモンスーンジャイアの間の流れに沿って北西進



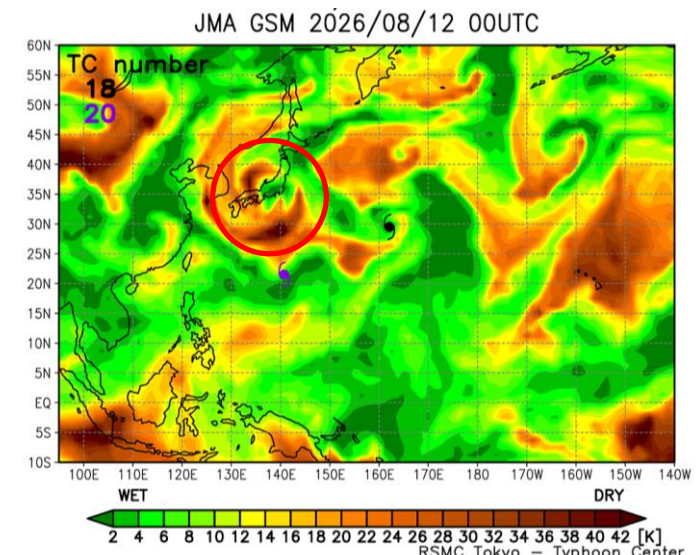
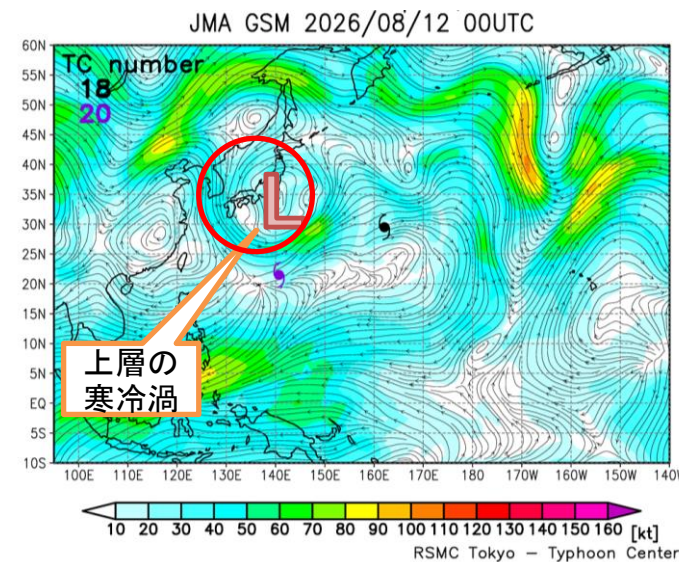
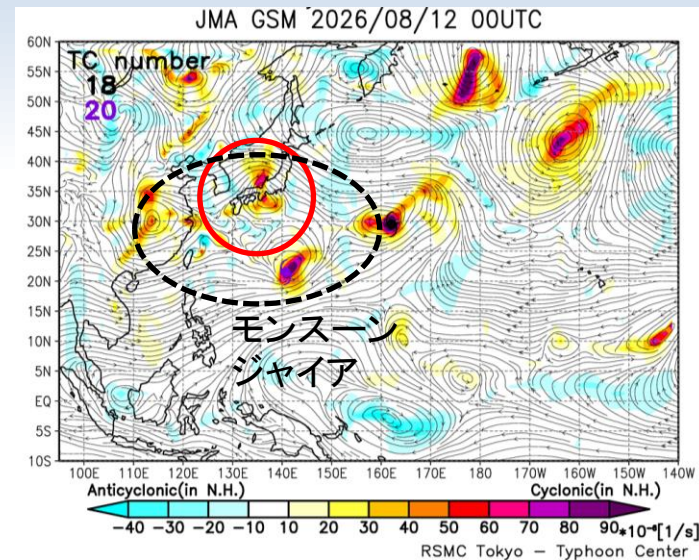
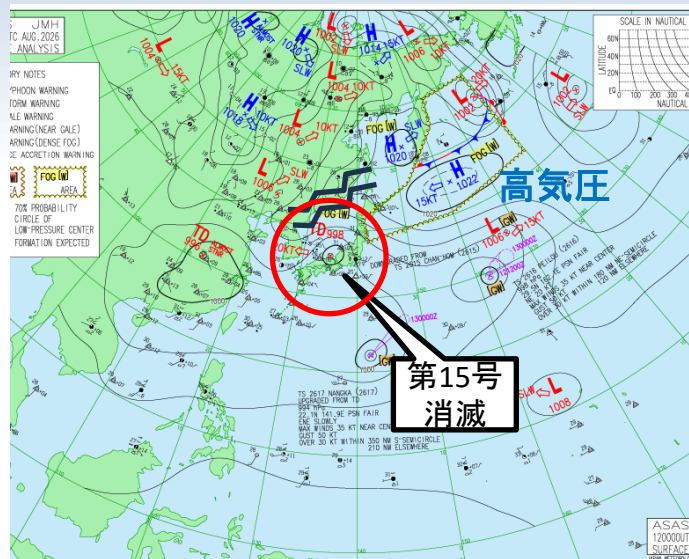
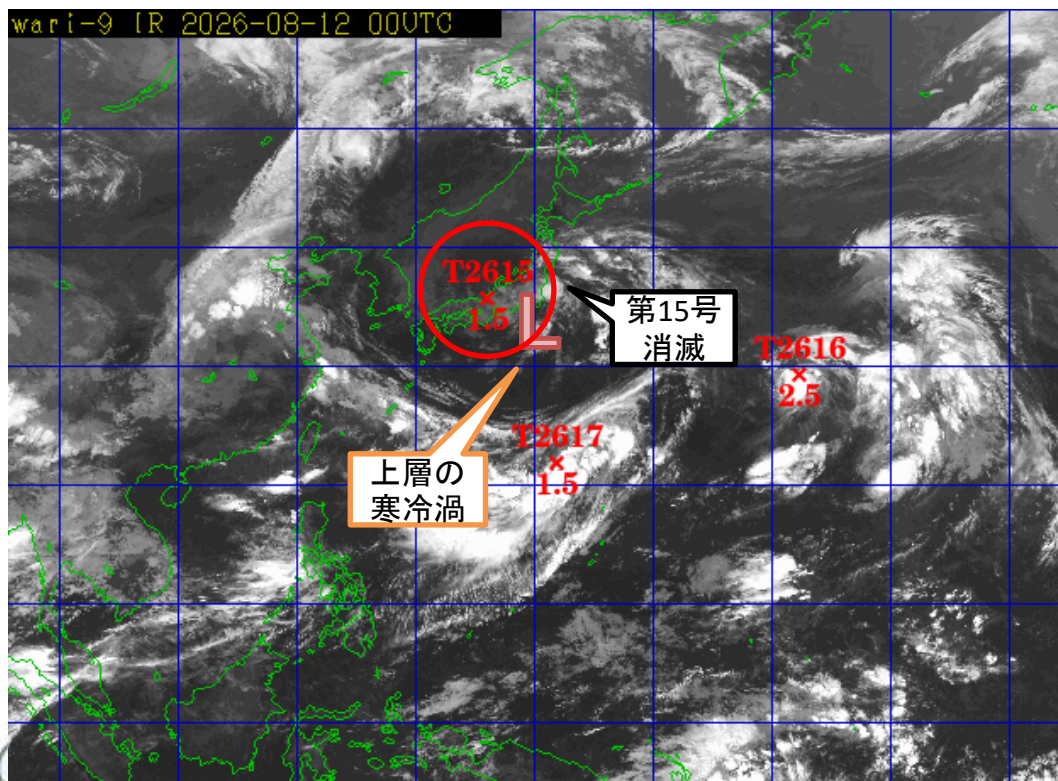
台風第15号 8月11日00UTC

- 新たな上層寒冷渦の周辺の乾燥域が流入し、下層渦が露出
- 北側の勢力の強い高気圧と南側のモンスーンジャイアの流れに沿って、上層寒冷渦の影響も受けながら、西進



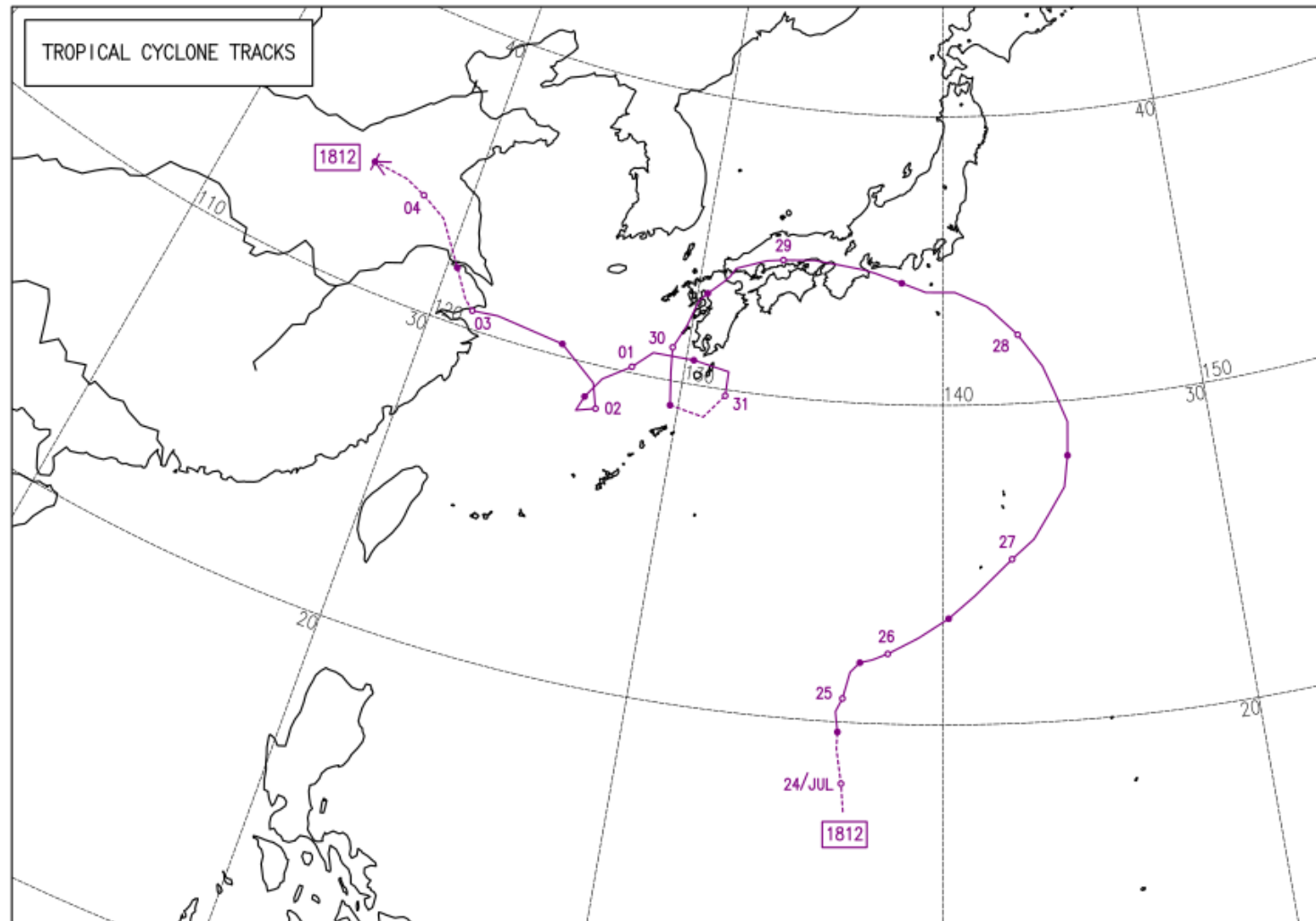
台風第15号 8月12日00UTC

- 上陸後、雲域が急速に衰弱
- 北側の勢力の強い高気圧と南側のモンスーンジャイアの間の流れに沿って、上層寒冷渦の影響も受けながら、西進



過去に東から西に進んだ事例

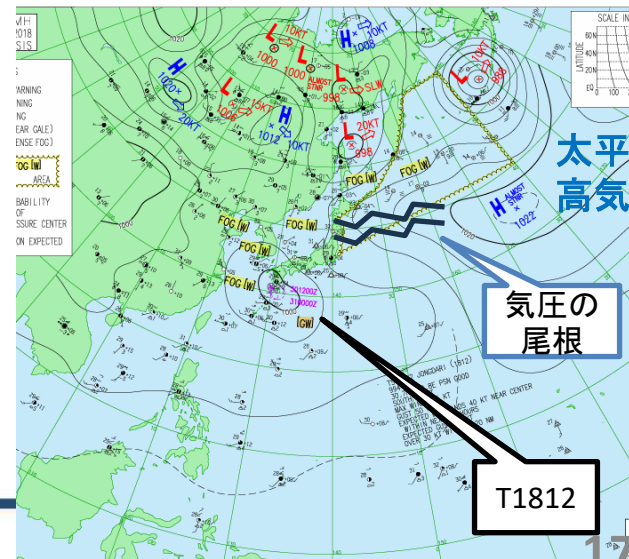
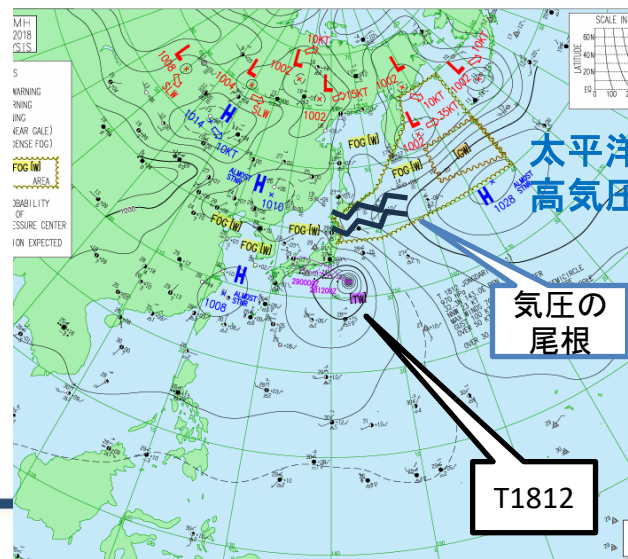
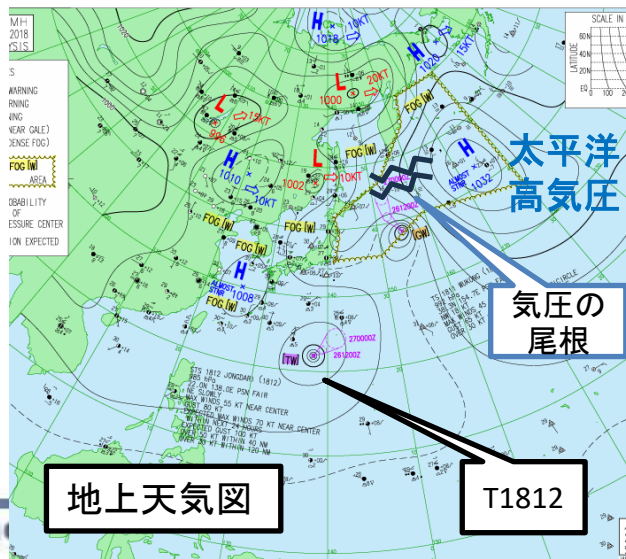
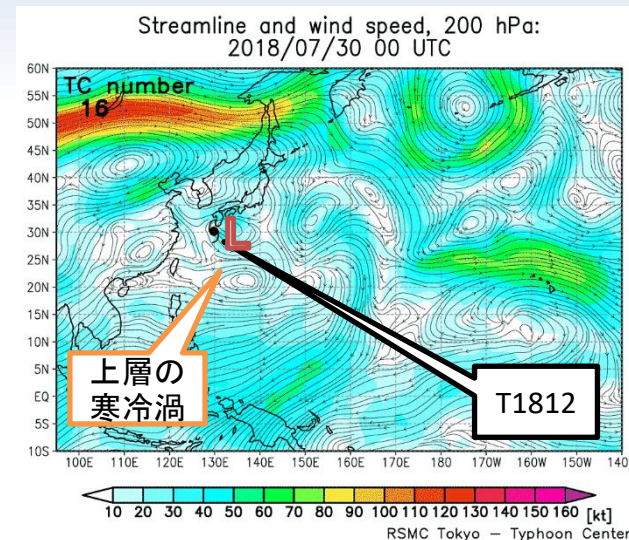
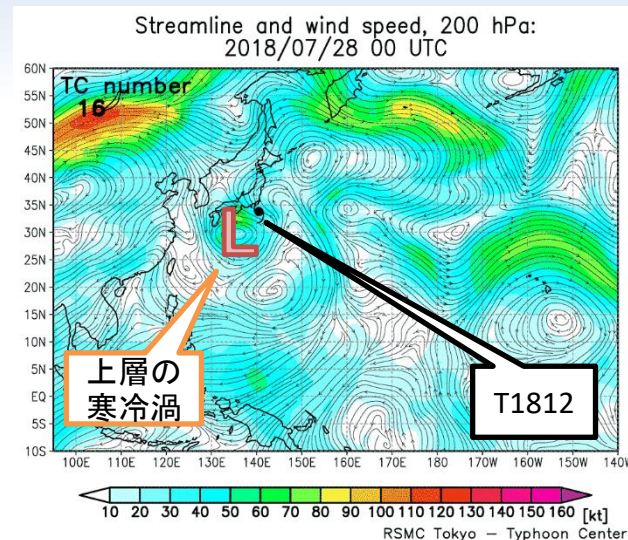
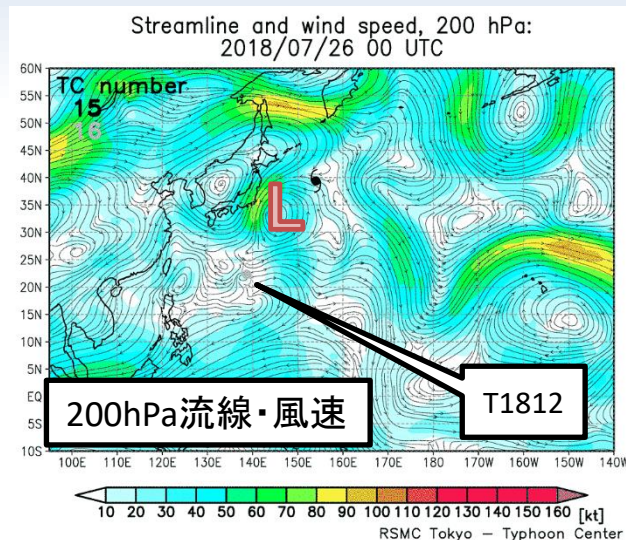
①2018年台風第12号



過去に東から西に進んだ事例

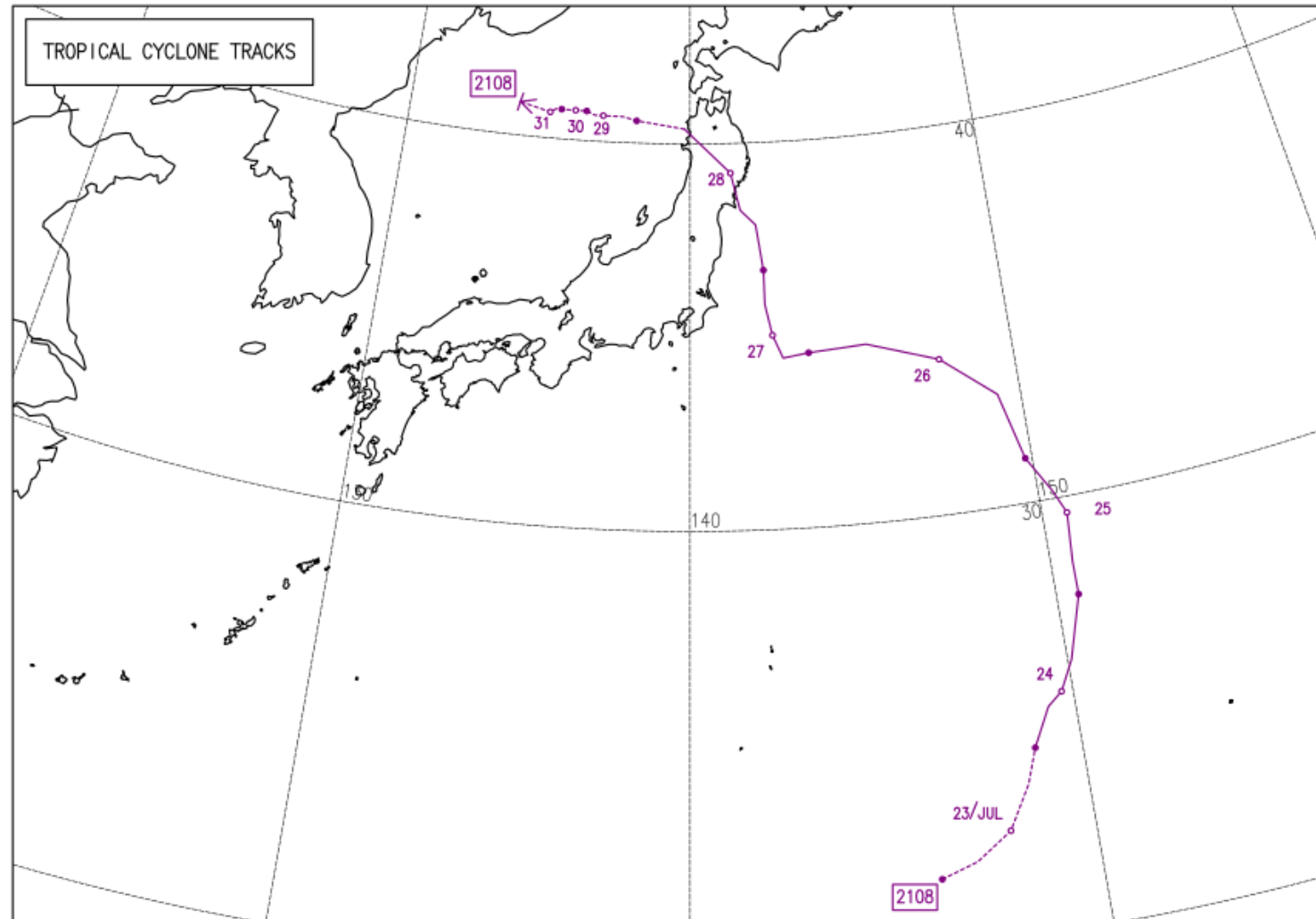
①2018年台風第12号

- 太平洋高気圧から日本に伸びる気圧の尾根に北上を阻まれつつ、日本の東から南西進してきた大規模な上層寒冷渦の影響を受けて西進した



過去に東から西に進んだ事例

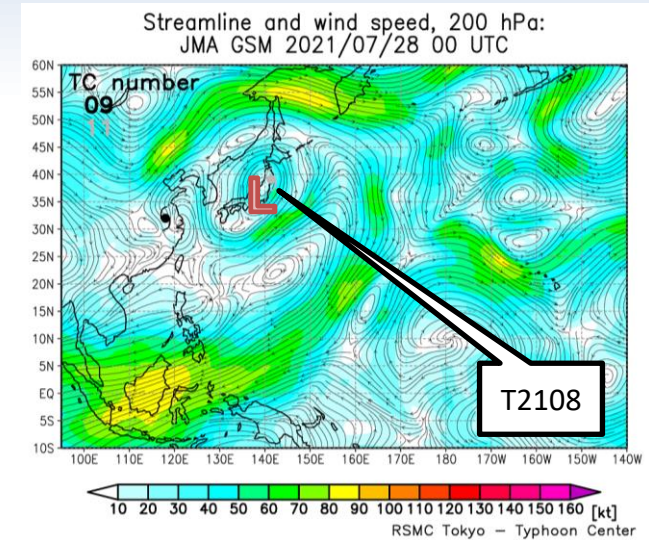
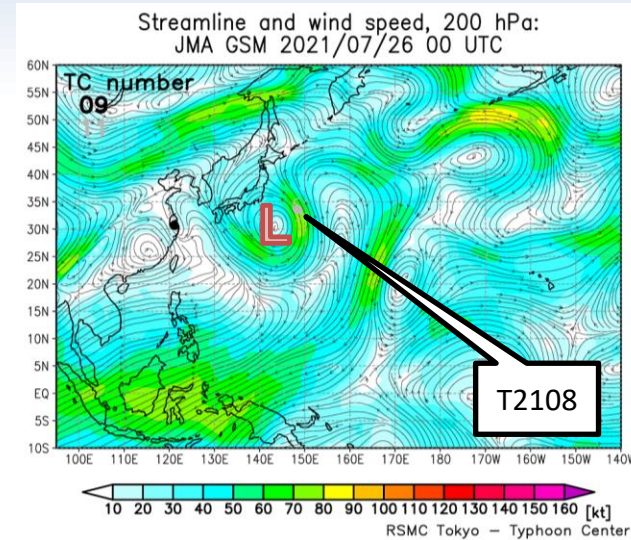
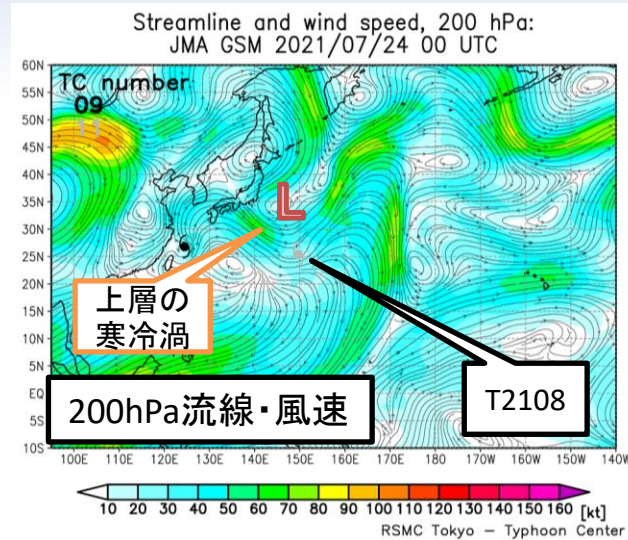
②2021年台風第8号



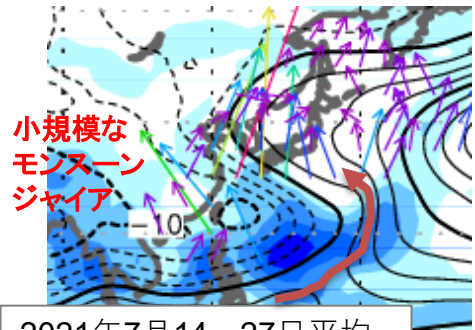
過去に東から西に進んだ事例

②2021年台風第8号

- 小規模なモンスーンジャイアの流れの影響を受けながら反時計回りに北上した後、上層寒冷渦の影響を受けて北～北西進した

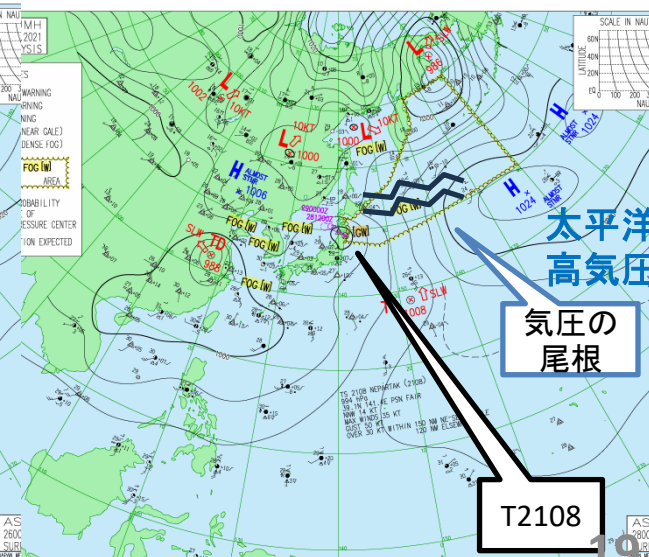
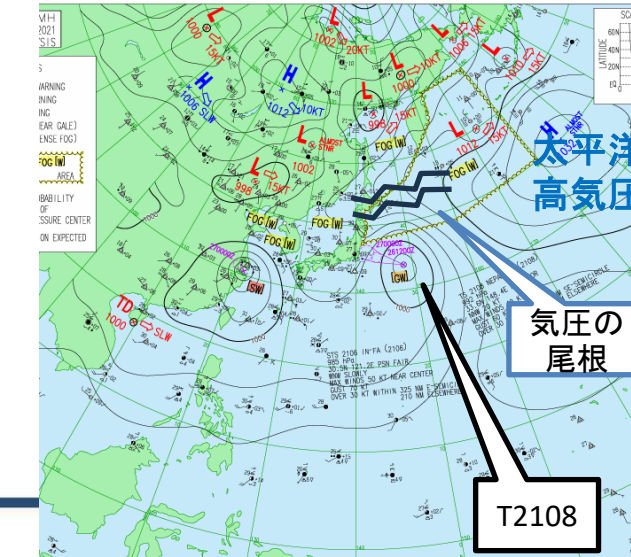
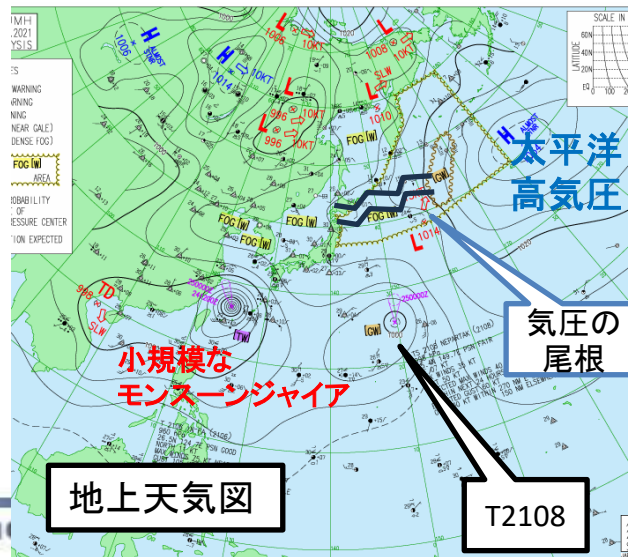


850hPa実況 (JRA-3Q)



2021年7月14～27日平均
2週間平均

シェード：OLR
コンター：流線関数



まとめ

- 令和8年夏の台風発生数は17個で、平年値11.0個を大きく上回り、昭和26年の統計開始以降で3位タイの多さとなった。この主な要因として、7月～8月にかけて偏東風波動の活動が活発だったことが挙げられる。なお、8月前半を中心に日本の南に形成・維持されたモンスーンジャイアの周辺で発生した台風もあった。
- 偏東風波動の活動度と夏の台風発生数には有意な相関があり、エルニーニョ現象が発生している夏には偏東風波動の活動が強まる傾向があることから、令和8年夏の台風発生数の多さには、顕著なエルニーニョ現象が影響した可能性がある。
- 8月上旬に発生した台風第15号は、日本の東の海上から茨城県に初めて上陸して本州を西に進むなど、過去あまり例のない経路をとった。これは、北側の勢力の強い高気圧と南側のモンスーンジャイアの流れに沿ったことに加え、南下した複数の上層寒冷渦の影響も受けたことによる。